

武田軍のあっけない崩壊

戦国時代の後期になりますと、誰が天下を取るか公家も武家も巷でも予想しました。

後掲の「関東・中部の戦国大名勢力図（１５８１）」を参照ください。

候補は次の戦国大名でしょう。

近畿を抑える信長の織田家、中国地方の覇者の毛利家、甲斐国（山梨県）、信濃国（長野県）・駿河国（静岡県の中・東部）・遠江国の東部（静岡県西部）・上野国の西部（群馬県の西部）を支配する武田信玄、越前国（新潟県）・越中国（富山県）、加賀国（石川県）・能登国（石川県）を支配し、関東をも脅かす謙信の上杉家、それに伊豆国（静岡県東部）・相模の国（神奈川県西部）・武蔵国（東京都・埼玉県・神奈川県東部）を支配し、上野国（群馬県）・下野国（栃木県）、下総国（千葉県）へも侵略を試みる三代目の氏康の北条家となりますでしょう。

武将としての実績は毛利元就でしょうが、既に病没して三代目の輝元になっています。

東海の雄であった今川義元も織田信長に桶狭間の戦いで討ち取られ、今川家はその後武田信玄に滅ぼされました。

その後は武田信玄か上杉謙信かと言われましたが、川中島の戦いで信玄が勝ち、信玄が一番の風評です。

しかし信玄にとって信長の近畿地方での勢力増大は油断できません。ここで、信長を叩く、もしくは潰す必要を感じたのです。

信玄は、当初信長やその同盟国の徳川家康とは同盟を結んでいたのですが、破棄して、家康の領域の三河国、遠江国の東部を攻めます。

三方ヶ原の戦い等、勝ち続けていたのですが、思いがけないことが起こります。遠征途中の陣中で信玄が病没してしまい、遠征軍は甲斐に引き上げます。

天正元年（１５７３年）のことです。

さてここからが本題です。

信玄の後継は四男の勝頼です。

長男は信玄の勘当され死没、次男は盲目で三男は夭折で、勝頼が後継に決まっていたのです。

勝頼は、信玄が滅ぼした諏訪氏の姫と信玄の間の子です。

本来は信玄が獲得した信濃の諏訪地方の国衆（豪族）を仕切る仕事を与えられていたのですが、長男の勘当で嫡男となりました。

信玄は3年間その死を秘匿せよと遺言しました。

秘匿の意味は勝頼に3年間は内政に専念せよとの意味でしょう。

しかしすぐに信長も知ることになりました。信長は一安心したでしょう。

ご存じのように勝頼は織田信長に対抗して直接には二度対戦して二度大敗して二度目の対戦で武田家は崩壊して滅亡してしまいます。

一度目は長篠合戦と言われており三河国（愛知県東部）の東北の設楽ヶ原で織田信長・徳川連合軍に大敗します。

そして7年後の1582年（天正10年）に織田軍と徳川軍の一斉攻撃で壊滅して武田家は絶滅します。

敗戦はみじめなものでした。

信濃国でも駿河国、甲斐国でも十数の城の城主のほとんどが自落（戦わず逃げる）又は城内で裏切りがありで開城して投降してしまいます。

一つの城は一日持つか持たぬかです。

1582年2月3日に開戦で3月11日に勝頼親子が自刃します。

平安末期から鎌倉、室町、戦国時代と続いた甲斐の国主・守護大名で源氏の名門武田家は滅亡したのです。

勝頼は凡庸な人物だったのでしょうか、基本的な戦略、戦術に又家臣団や領国統制に重要な失敗があったのでしょうか。

勝頼の武田家領の統治は信玄の死の1573年（天正元年）から信長軍に敗れる1582年（天正10年）の9年間です。

この間の勝頼の活動の概略と武田軍団崩壊の原因を探ってみたいと思います

す。

先ず崩壊の基本理由です。

○長篠合戦（設楽原の戦い）で大敗して、信玄以来の重臣を多数を戦死させました。（1575年—天正3）

信玄の四天王と言われた馬場信春、内藤昌豊、山県昌景の三人外武田二十四将の多くの武将たちです。

重臣の勇将が対戦に反対したにも関わらず戦闘し大敗で、その重臣の戦死はその後の武田軍団の戦力を減退させ、勝頼の権威失墜の方向へ向かいます。

信玄の残した大事な財産でした。武将の子たちは若く戦力ダウンです。

重臣たちは織田・徳川連合軍が2，5万人に対し、引き連れてきた武田軍は1，5万人で、野戦では対戦しないのが常套であると主張します。

勝頼は決戦を主張して引きません。

重臣たちは折れて決戦となりました。

そして勝頼を戦場から逃して戦死しました。

無理な対戦でした。

何故勝頼は突き進んだのかです。

実績のない勝頼がここで信長に勝って、勇将たちの鼻を明かして、自分の統治体制を確立したかったからではないかと言われています。

○この後、織田信長より勝頼に和議の申し入れがありますが、これを断ります。

信長が本願寺顕如との闘いが苦戦、顕如と上杉謙信が同盟のことがあったからでしょう。

勝頼が大敗後もまだ強気の姿勢が分かります。

しかしここで信長と同盟したとしても信長が以後約束を守るかは分かりません。

○上杉謙信が病没（1578年—天正6）します。

後跡目相続をめぐって謙信の甥の景勝と養子の景虎の間で争いが起きます。

景虎は、謙信と亡き北条氏康と間との同盟で、氏康の七男を謙信へ人質と出したもので、その後養子になったと言われていました。

現北条家当主氏政の弟ですが、氏政は謙信と同盟を破棄して、武田信玄と同盟を結びます。

景虎は人質の身でありますので、本来は北条家に帰されるか、殺されるかです。

しかし謙信に好かれていたのです。上杉家に残っていました。

謙信が亡くなり、後継ぎ景勝を嫌う派に担ぎ出されて一派を作り、景勝に對抗して跡目相続に名乗りをあげて、景勝と争いになりました。

北条氏政は当然弟を支援したいのです。

しかし、下野や上総で反北条の動きがあり、越後に出動出来ません。

同盟国の武田勝頼に景虎援護で出動を要請しました。

景勝は景虎の援護と言うよりは景勝と景虎・北条氏政との調停を行い、自分主導で上杉の跡目相続を取り納め、その後関東、中部、東海地方を武田優位な情勢を計ろうとしました。

しかしこれは無理でした。

景勝と景虎の争いは次第に景勝が優勢となります。

勝頼は方針を転換して景勝側に味方することにしました。

勝頼と景勝は同盟を結びます（甲越同盟）

二人の跡目争いは結局景勝が勝ちました。景勝は自刃です（1579年）。

これまで結んでいた武田家と北条家の同盟は破綻します。

勝頼は上杉景勝と北条氏政とを天秤にかけ上杉景勝を取ったのです。

北条氏政は武田・上杉連盟に対抗して徳川家康と同盟を組みます（1579年—天正7）

この結果、武田勝頼は西よりは徳川家康に東からは北条氏政に挟撃され、遠江国の東部（静岡県西部）と駿河と伊豆・相模国境で防衛に苦戦します。

上杉景勝は対信長で北陸方面へ戦力を張り付けで、北からの関東の北条攻めは出来ません。

勝頼の北条への戦いは駿河と伊豆・相模の国境で、又上野で武田の単独での戦いとなり、上杉は北条への戦いの役に立ちません。上杉の同盟は有効に働きません。

○第1次勝頼と信長の和睦交渉

徳川と北条を敵まわし、上杉が役に立たない情勢の中で、信長本軍に攻められたらたまりません。勝頼は信長に使節を安土城に送り和睦交渉をしようと思いました。使節は天正7年＝1579年10月から1580年3月まで安土で待ちましたが面会してもらえませんでした。

この間信長は、対武田をにらみ、北条氏政と同盟を結びます（1580年＝天正8）。

これで西からは信長と家康連合、東からは北条氏政で北の上杉以外は武田領国（信濃、甲斐、駿河、遠江の東部、上野）は挟撃される形となります。

信長はいよいよ宿敵大坂の石山本願寺に対しては優位に展開、毛利への侵攻も進めます。

加賀、能登を支配し、備中の上杉領にも侵攻します。

○第2次和睦交渉

1580年8月に勝頼は信長の嫡男惣領の信忠に第2次和睦交渉を持ちかけます。

しかし進展しません。

この年1月三木城の別所長治を自刃させ、4月には本願寺の顕如が降伏し、毛利領への猛攻勢が始まります。

信長にとってもう武田と譲歩して和睦する相手ではありません。

勝頼にしても信長の総攻撃を受ければ勝ち目はないと考えていたでしょう。

1581年＝天正9年3月には人質にっていた信長の五男信房を返します。

しかし信長から何の反応也没有。

無償で大事な交渉の玉を渡してしまったのです。何とか交渉に応じてもらいたい思いからです。

しかし和睦交渉には応じてもらえません。

注 信濃（武田領地）と美濃（織田領地）との国境近くにある岩村城主の遠山氏に信長が幼い息子信房を養子に出していたが遠山氏が没した後、その妻で後継の女城主（信長の叔母）が信房を武田信玄に人質に出してしまい、武田家で育てられた人

○上杉景勝が信長に和睦交渉

上杉景勝は勝頼に信長との和睦交渉は自分たちとの同盟違反だとなじります。

ところが一方で景勝は信長に和睦交渉を持ちかけていたのです。

信長が交渉に応じません。

○重臣の不満

勝頼は参謀として近臣の長坂 釣 閑斎^{ちようかんさい}と服部勝忠を重用します。二人の戦略に重臣たちや信濃国の国衆（武田家の外様家来）の反発がありました。

これが後述の家臣の裏切りの主要な原因だと言うのが江戸時代に入って著わされた「甲陽軍鑑」（武田家家来小幡勘兵衛作）です。

次に敗戦の直接原因を見てみます。

○高天神城の干し殺し

遠江国の東部にある武田の重要な拠点の城です（西部は徳川が支配）。

しかし徳川軍は城を囲み、城への糧道を絶ちます。城兵は飢えます。

200人以上の餓死者がでます。それでも勝頼は援軍を派遣しませんでした。落城します。

味方を見殺しにしたのです。

勝頼はこの城での決戦を避け、信濃国での決戦を目論んだのです。

しかし味方から信用を落とします。

○裏切り、謀叛の読出

信長軍は美濃（岐阜県）の東側から武田領国の信濃国の西部への侵攻です。

そこが織田軍と武田軍の主戦場となります。

まず信濃国の西部で織田領の美濃国と接している木曾善昌が裏切り、武田攻撃の先方となりました。

武田軍は攻撃しましたが木曾・織田軍に勝てません。

武田軍防禦のためのいくつもの城があり、城兵が守っています。

そのほとんどの城の城主が戦わず逃げるか、織田軍に味方してしまいます。

城内で城主に反旗を翻して織田軍に味方する者もいます。

そうです。城主もほとんどの侍が勝頼に謀反、裏切りをしたのです。

抵抗した主力の高遠城も一日で落ちました。内部で裏切りが出たのです。

何故こんなに裏切りが出たのかです。

信濃の軍勢の多くは元々は武田家の家来でなく信玄の時に征服されて家来になった者で武田家に恩義が薄いこと、織田軍の圧倒的勢力を感じたこと、それに最も大きい理由は上記高天神城に援軍を出さず、味方を見殺しにした勝頼の仕打ち、おまけに戦いで死ぬのではなく餓死させたことはいつ自分の身かと思ったでしょう。

更に身内や譜代の臣からも裏切りが出たことです。

親類で譜代筆頭の穴山梅雪や小山田昌信です。親戚関係にある準身内です。

穴山は駿河国を任されていて、勝頼の武田本軍に次ぐ軍勢を持っています。

徳川軍に合流して駿河から甲斐へ侵攻してきたのです。

小山田には勝頼が織田軍に甲斐で追い詰められた最後に裏切られます。

この二人の裏切りも決定的です。

勝頼は主だった家臣や城主には親子を人質を取っていました。

それでも彼らは勝頼を裏切りました。

人質の多くは新府城で焼き殺されました。

裏切った家臣たちは覚悟の上での織田への味方でしょう。

織田信長もその外の戦国大名も世間一般もそして勝頼本人もこんなに簡単に

敗戦するとは思いませんでした。

織田軍や徳川軍に攻撃される中で十数回の攻城戦がありましたが、城主はほとんど戦わずに開城、降参し、あるいは織田軍に入ります。大きな戦いは二回ほどありましたが、2日程で負けます。

敗戦は味方の裏切りによる自壊、自滅と言えます。

勝頼統領の下で9年間甲斐軍団は遠江、駿河、上野で激しく戦って来ました。徳川との遠江では苦戦、駿河の国境では北条と互角、上野では戦果も上げました。

これまで身内、譜代、外様の家臣の裏切りはありませんでした。

後世、なぜこんなに簡単に負けて滅亡したのか批評します。

敗戦の原因について上記の内致命的な失敗は何なのか。一つではなく原因は複合しているのか。

それとも信長全国制覇の下で、武田勝頼の武田家には存続の可能性はなかったのか。絶滅しかなかったのかです。

織田信長は武田家はもとより、毛利家も上杉家も同盟を結んでいた北条家も絶滅させることを考えていたとの説もあります。

戦国の時代に天下取りを期待され、本人も意欲ある大大名の生き残る道は険しいのです。

その後北条家も豊臣時代に滅亡し、上杉家と毛利家は徳川天下の下で臣従してお家は縮小しながら生き残りしました。

以上

2025年7月10日

梅 一声

